香美市文芸

風の流れ

【短歌】

楠瀬　兵五郎　選

乗客はわたくし一人バスに乗ることも久しき峡の夕暮れ　松中　賀代
Tシャツにピアス光りて夏駆くるこの若きらに力湧き出づ　武内　弘子
少年は屋根の上にてギター弾く旋律確かに至福のひととき　北村佐喜子
五年生の仲間に入り植える田の活気あふれる子供農園　門田　明子
太古より青田とさだめありしごと育ちさやさや風わたりゆく　竹村　咲子
峡深く滴る水の音ひそか川遥かなる旅始まりぬ　高橋　章
望の月朧げにただ浮かびゐる庭に白々と梔子の花　出原　久子
引きし草腕いつぱいに抱へゆく歯をかむ顔に足踏みしめて　公文　正子
古里に納骨堂の建ちにけり嫁の功績記す石文　小松　隆之
十六夜の月の世界に遊べるか祖母の寝顔に猫も寄り添ふ　山崎　貴子
眠れぬ夜は新美南吉・金子みすゞの仲間に入れてもらって遊ぶ　吉本　悦子
塩の道行けば緑にむせぶ中文代峠に古人を思う　公文　千恵
同窓会昔話しににぎわえり年輪深き笑顔尊く　谷内　務
花の苗やり取りをせし友ら逝き住まわぬ庭に咲くを見るなり　門田　喜美
農作業仕舞つけるか否相撲見ることにして老の一日　高野　和一
大輪の紫陽花の花今たわわ主の去りし昔の家に　小野寺朱実
遊ぶにも根性いるぞと声のする奈半利に集うグランドゴルフ　伊藤　清子
葉のまわり数多小さき葉の付きて「子だくさん」かと吾は納得　秋山　正美
広き田に青鷺一羽たたずめり中国画にみる賢人のごとく　大石　信子
黄揚羽ねらいし猫はとび立たれ残念にきっと見上げるその目　古谷　由美
一夜明け部屋にさし来る朝日さえ待ち望むわれ寂しきかな　高田　清子
雨よけのイチゴの苗の古葉とる一つひとつのきほひ見ながら　小野川惠仁
おずおずと雀が一羽入りゆくコイン精米所の戸のすき間より　佐々木真里
足冷ゆれば椅子に正座し昼餉する庭さはやかに六月の風　都築　初代
うぶすなの宮居の杜に啼く梟くぐもる声をわがなつかしむ　田村　房子
新聞にふと頬笑ましき出合ひあり「笑進笑明」の文字簡明に　有沢　泰子
上弦の文づきのひかり雲の間にうかび稲田のもりもりと照る　大石さち子
雪覆う夏の富士の山映りたるかの日思えば恋しきかぎり　尾立　かよ
二本の千両に始めての実がつきぬ嬉しくいとし緑あわき粒　横田直加子
梅雨明けの気配近づくこの頃を倒伏のまま熟れてゆく稲　竹村　稔美
台風の激しきを聞き嫁は病む吾を伴れ孫の家に一夜を過ごす　山崎　緑
台風に倒れ伏したる五万本少し手を貸すケナフ伸びよと　宮地　亀好
朝までの時限られて夕すげのひたすらに咲く花を愛しむ　門脇　千代
豊ノ島けがの足をば案じつつ十五日間の長かりしかな　山﨑　冨美
十月に出荷予定の柚子玉に袋掛けする猛暑の中に　坂本　好
傾ぐ日はくもりに鈍く眼下のにごる湖面の照れる一とき　小松もとみ
空覆ふ木の葉ざわめき胸ゆすり自立・自立と蝉鳴き止まず　町　耿子
台風の過ぎゆく畑の草に絡み虐げらるる紅の昼顔　山下　弓枝
ラジオにてわが詩読まるる声のこりおぼろおぼろに過ぎし十代　坂上のぶ子
亡き夫の開きしこの畑荒らすまじ山鳩の声遠く聞こゆる　法光院俊子
老いしわれ電動カーに乗る身には雨の日よりも晴れ有難し　竹村　松子
この肉は大丈夫かとをさなごが不信といふを知りてしまへり　中西　敏子
六月の梅雨の季節の袋掛け雨少くて葡萄病気出ず　森本真理子
朝には水替へかふるわが慣ひ色とりどりに卓の花々　三宮のり子
近くなり遠くなりして啼く声は夏めく森の奥に木霊す　佐竹　玲子
コメ八俵とりし棚田の草の中地籍調査の朱の杭をうつ　大岸由紀子
寝ながらに過ぎ来しをしのぶ老いの身の夜長の夢か時を忘るる　鍵山　みつ
幾重にも寄る白波に潮けぶりなびく半島を東岸に越ゆ　楠瀬兵五郎

※俳句・短歌の応募は、企画課内広報委員会事務局まで。